書評

石川ひろの著
「保健医療専門職のためのヘルスコミュニケーション学入門」
Book Review
Health Communication
- An Introduction for Health Professionals (in Japanese)
by Hirono Ishikawa

木内貴弘
Takahiro Kiuchi
東京大学大学院医学系研究科公共健康医学専攻医療コミュニケーション学分野
Department of Health Communication, School of Public Health,
Graduate School of Medicine, The University of Tokyo

1. はじめに

本稿は、石川ひろの（帝京大学大学院公衆衛生学研究科教授）著「保健医療専門職のためのヘルスコミュニケーション学入門．大修館書店 2020」（以下「入門」という）の書評である。最初に、筆者（木内貴弘）が本稿に関連して利益相反の自己申告（該当欄参照）をしていることに触れておかなければならない。それでも敢えて書評を書くことにした理由は、本書が、日本の保健医療専門職・学生のために日本語で書かれた、最初の、そして、現時点で唯一のヘルスコミュニケーション学教科書であるため、より多くの方にその概要を知っていただきたいと考えたからである。

１つの独立した学問分野の確立のための 3 点セットとして、専門学会、専門学術雑誌、標準的な教科書が挙げられることがある。既に国内では日本ヘルスコミュニケーション学会が設立され、その学会誌（本誌）も発刊されているが、標準的な教科書がまだなかった。ヘルスコミュニケーション学の場合は、各国の文化・慣習・制度等に特有な部分が存在するため、海外で定番の教科書の翻訳では日本特有の状況に対応ができない部分が多い。このため、日本におけるヘルスコミュニケーション学の確立のためにも、日本の状況に対応した日本語の教科書の登場が切に待たれていたところであった。「入門」は、こうしたことも評価されて、日本ヘルスコミュニケーション学会 2021 年度優秀書籍賞を受賞している（筆者は、利益相反のため、賞の審査には関与していない）[1]。

2. 「入門」について

2.1「入門」の概要

まずは「入門」の体裁だが、大きさは B5 判と少し大き目で、表紙は黄緑色のソフトカバーとなっており、分量は全体で 144 頁と比較的コンパクトである。定価は、税込 1,980 円と学生用の教科書としても無理のない価格設定となっている。本文はすべて石川ひろの教授本人により執筆されているが、別途６名の執筆者による 1 頁程度のコラムが各人１件ずつ挿入されており、一貫した均一な記述にアクセントがつけられている。章立ては、表 1 のとおり、11 章から構成されており、入門用の教科書として、ヘルスコミュニケーションの全分野をカバーする網羅性が明確に意識されている。

表１.「入門」の章立て

章番号	章の名称
第 1 章	ヘルスコミュニケーションとは
第 2 章	患者 - 医療者関係とコミュニケーション
第 3 章	相互理解のためのコミュニケーション
第 4 章	情報提供のためのコミュニケーション
第 5 章	行動変容を促すコミュニケーション
第 6 章	多職種連携のコミュニケーション
第 7 章	健康教育とヘルスキャンペーン
第 8 章	リスクコミュニケーション
第 9 章	マスメディアによるコミュニケーション
第 10 章	オンラインのコミュニケーション
第 11 章	社会変革とアドボカシーのコミュニケーション

2.2 「入門」の優れた点

まずは、「入門」が読者として想定している、ヘルスコミュニケーション学に関して初心者の健康医療系の実務家・学生が実際に読者であると想定した場合の優れた点を挙げてみたい。筆者の知る限り、英語版教科書でも、下記の条件をすべて満たすものは、Athena du Pre らの教科書（もともと du Pre の単著であったが現在は Overton との共著になっている）のみである[2]。

(1) 網羅性と不偏性

ヘルスコミュニケーション学の基本的な事項がバランスよく網羅されており、ヘルスコミュニケーション学全体が概観できる。また特定の学説や主張に偏らず、万遍なく、諸説を公平に要領よく記載していることは、初学者向けの教科書として重要な点である。大学等で教科書として使用する場合には、ヘルスコミュニケーション学

の全体を俯瞰する形の講義に最適であるが、教員の得意な分野を中心とした内容の講義であっても、学生が併読すれば講義でカバーされなかった領域を俯瞰できるため、非常に有益である。欧米でもヘルスコミュニケーション学の教科書は、著者の得意分野（特にメディアコミュニケーションか対人コミュニケーションのどちらか）に偏ったものがほとんどあり、著者の尋常でない苦労と努力がうかがわれる。

(2) 同一の著者による執筆

本書は、コラムを除いたすべての部分を石川教授自身が直接執筆している点が大きな特長となっている。近年、教科書や研究書の分担執筆が広がっている。専門分野の細分化が進んでいることから致し方ない面もあるが、分担執筆では、内容や記述の統一性・整合性・難易度の調整が難しい。これらの分担執筆の問題点は、初心者を対象とする教科書では特に影響が大きいと考える。

石川教授は、当教室在籍時は准教授として、講義、演習のカリキュラムの取りまとめ、学生への対応、外部からの講師への対応を担当されていた。ヘルスコミュニケーション学の各領域の多様性に対応して、講義、演習は、当教室の教員と外部からの講師が、各々１～２コマを担当するオムニバス形式となっている。取りまとめが役目なので、講義・演習に自らが必ずしもすべて参加する必要はないにもかかわらず（特に同一講義の２年目以降）、石川教授は講義・演習には毎回すべて出席されており、随分真面目な方だと感心していたが、実は講義、演習を何度も繰り返し、聞いて、内容を咀嚼し、消化されていたのだと、本書の刊行により分かった次第である。

(3) わかりやすさや学習のための工夫

本書は、初心者に配慮した、平易な日本語で記述されている。各章の初めに各章で学ぶことの概要、キーワードが提示されており、章末にはまとめと課題が提示されている等、教科書としての学習のしやすさのための工夫が十分施されている。これは、石川教授が医学教育への造詣が深いことによるものと考えている。

(4) エビデンスにもとづく教科書執筆

石川教授は一流のヘルスコミュニケーション学研究者であり、国内随一の研究業績がある。本書には多くの学術論文が引用文献として挙げられているが、これは本書が実務家によるいわゆるハウツーものの解説書とは異なり、研究成果のエビデンスに基づいて、ハウツーやスキルも含めた「ヘルスコミュニケーション学」を紹介する方針で執筆されていることを示している。これは、大学、大学院におけるヘルスコミュニケーション学講義のあるべき姿であると考える。

2.3 「入門」の欠点

以下にわずかではあるが、「入門」の欠点を挙げてみる。

(1)記述のレベルの浅さ

初心者向け教科書としての簡潔さを重視し、１名の著者による執筆によって、記述を均一にして、一貫性を確保したことに伴い、各項目の記述のレベルが浅くなっている。各章で更に学びたい人用の書籍は紹介されてはいるものの、もっと手軽により深い知識を学べるようにする方が望ましいと考える。ただし、各項目の記述を厚くすれば、初学者への敷居が高くなり、読みこなせる分量を超えてしまうかもしれない。また石川教授単独で執筆することが難しくなって、分担執筆に移行すると、単独執筆の利点が失われることも考えられる。

(2)章立ての分かりにくさ

全体が 11 章となっているが各章の関係がわかりにくい。ヘルスコミュニケーションは、大まかに分けて、対人コミュニケーション、メディアコミュニケーションに区分されることが多いが、この区分を使って、各章の関係を整理した方がヘルスコミュニケーン学の全体像がわかりやすいのではないかと考える。

3. 考察

3.1 健康医療系のヘルスコミュニケーション学教科書

「入門」の大きな特色は、日本初の「医療系の大学等の講義」で使える「ヘルスコミュニケーション学の教科書」であることである。従来から、国内でもヘルスコミュニケーション学の優れた書籍は多数刊行されてきたが、そのほとんどは、医療の現場での、より良い対人コミュニケーションの方策について、医療者向けの解説を行う実用書であった。大学での講義を想定したものとして、「よくわかるヘルスコミュニケーション」という書籍が刊行されていた。人文社会系の研究者が中心となって執筆されたものであり、ヘルスコミュニケーションに関する様々な視点を紹介しているが、保健医療系の実務家・学生が必要とする知識、スキルについては記載されておらず、保健医療系の教科書としては使うことはできない[3]。ただし、患者や市民の視点をより良く知るために、「入門」の副読本としては使用できる。

3.2「入門」の今後の改訂要望事項

最後に、今後「入門」をどう改訂していくのがよいかについて、筆者の勝手な私見を述べたい。

1) 内容のボリュームを増やす

欧米の大学生向けの有名な教科書では、大部なものが多い。例えば、筆者が持っているものでは、ギデンスの「社会学」、マンキューの「経済学」、アルベルト他の「細胞の分子生物学」等である[4-7]。学習意欲の高い人のために、記述の厚い教科書は必要であると考える。通常分担執筆の場合には、全体の編集者が分担執筆者の原稿の内容について、強い制約や大きな訂正を要請することは、（特に日本では）難しいかもしれない。この対策としては、原版は石川教授のものを利用して、これをベースとして改訂を他の方にお願いする方針で改訂をしてはどうであろうか。石川教授が指導してきた大学院生の多くが、研究者となっており、改訂を依頼すれば、かなり内容の統制が可能ではないだろうか。

記述を厚くすれば、短時間で全体を俯瞰したい人や講義の教科書として使う学部学生には、分量が多すぎるこ

とになりかねない。このようなニーズに対して、マンキュー「経済学」、「細胞の分子生物学」では、簡約版を用意している[8-9]。簡約版で基本を学習し、詳細を知りたい場合はオリジナル版という使い方ができれば理想的と思われる。

2) 章立ての変更

本書のベースとなった講義の構成は、年度によって、少しずつ異なるがほぼ表２のようになっている[10]。まず全体を「総論」、「対人主体」、「メディア主体」、「その他」の４部に分けて、更に各部を細分して章に分ける方が、初心者が全体像をつかみやすいと思われる。実際には、対人コミュニケーション主体の医療機関における医療者・患者コミュニケーションの場面でも、テレビやインターネットを介した情報は同時に入ってくるし、治療法の説明に文書や静止画等のメディアを使うことも多いので、このように単純に割り切れるわけでもない。しかし、初心者を相手にする場合は敢えて単純化して、全体像を先に掴ませる方がわかりやすいと考えている。

表２.「入門」のベースとなった講義の全体構成

(1) 総論 ・講義の全体概要 ・研究方法論
(2) 対人主体のコミュニケーション ・研究成果のエビデンスに基づく医療者による改善 ・患者・市民による改善 ・外国人患者への対応
(3)メディア主体のコミュニケーション ・各メディア（テレビ、新聞、インターネット）の特徴 ・メディアコンテンツ（文書、静止画、動画）の作成
(4) その他 ・対人・メディア複合のコミュニケーション等

3) 理解の確認のための問題と解答の追加

教科書を一通り読んだとしても、内容を問題として問われると正しく回答ができないことは非常に多い。欧米の教科書には、問題と解答が収載されているものや、問題と解答が別の書籍として販売されているものも多い。筆者は、問題に正しく回答できるようになって、はじめて理解が十分なレベルに達していると考えている。また問題に回答するために本文を読み直すことで理解が深まると考えている。特に医療系の学生には、卒業・就職の前に国家試験が待ち受けている。近年、コミュニケーション関連の問題も国家試験に出題されるようになっており、学生の学習意欲の向上のためにも、問題と解答の追加を望みたい。

4) 電子化版の出版

筆者は、個人及び研究室での書籍購入は、原則として電子化版としている。紙版を購入するのは、内容が同等の電子化版の書籍がない場合で、かつ該当の書籍がどうしても必要な場合に限定している。紙の書籍は、収納場所をとり、出し入れも不便で、検索性が大きく劣る。情報が容易に取り出せないメディアは、たとえ内容がまったく同一でも情報の価値が大きく劣っていると考えている。次回の改訂では、電子化版での出版も望みたい。

利益相反自己申告

書評対象の書籍の著者である石川ひろの教授は、筆者の所属する分野の元准教授であり、筆者と多数の共著論文や共同研究がある。また書評対象の書籍は、同分野が担当する講義がベースとなっている。ただし、筆者は、書評対象の執筆には一切関与していない。

引用文献

[1]日本ヘルスコミュニケーション学会．日本ヘルスコミュニケーション学会ホームページ（学術集会）http://healthcommunication.jp/holding.html （2021 年 11 月 18 日アクセス）

[2]du Pre A, Overton BC. Communicating About Health: Current Issues and Perspectives. 2020 Oxford Univ Press

[3]池田理知子、五十嵐紀子．よくわかるヘルスコミュニケーション．ミネルヴァ書房．2016

[4]アンソニー・ギデンズ．社会学第五版．而立書房. 2009

[5]N・グレゴリー・マンキュー．経済学 I マクロ編（第 4 版）．東洋経済新報社．2019

[6]N・グレゴリー・マンキュー．経済学 II ミクロ編（第４版）．東洋経済新報社．2019

[7]ブルース・アルバーツ他. 細胞の分子生物学（第６版）．ニュートンプレス．2017

[8]N・グレゴリー・マンキュー．入門経済学（第３版）．東洋経済新報社．2019

[9]ブルース・アルバーツ他．Essential 細胞生物学（第５版）．南江堂．2021

[10]東京大学大学院医学系研究科公共健康医学専攻医療コミュニケーション学分野．医療ミュニケーション学分野ホームページ（教育活動）https://www.umin.ac.jp/hc/education/ （2021 年 11 月 18 日アクセス）

***責任著者 Corresponding author: 木内貴弘**
e-mail: tak-kiuchi@umin.ac.jp